

第3回 四国圏広域地方計画有識者懇談会 議事要旨

1. 日時：令和5年3月22日（水）15:00～16:57

2. 場所：高松サポート合同庁舎北館13階 1306、1307会議室
（上記会議室を拠点としたWEB会議併用方式）

3. 出席委員

那須座長、入江委員、香西委員、近藤委員、坂本委員、隅田委員、淡野委員、
豊田委員、芳我委員、町田委員、モートン委員

4. 議事

1) 新たな四国圏広域地方計画の骨子（案）について

<主な発言内容> 委員発言順

(1) 議事

事務局より議事について説明を行ったのち、各委員から意見などの発言があった。各委員から出た意見は以下のとおり。

- ・ 【資料4-2】第2章1節2の概要の3つ目の点で、県庁所在地が分散して位置していると記載があるが、地理的なことをいっているのか、圏域内の交流が少ないことを言っているのか、四国圏の弱みとして描かれている所を含んだ内容であるのか意味が分かりづらい。地理的な意味での内容ならば「地理的に分散されている」と追記するなど、内容が統一的な意味として伝わるように工夫したほうが良い。
- ・ 【資料4-2】第2章2節の四国圏の将来像について。将来像すべてに共通することが「人が中心である」ことが考えられるが、四国圏としての色を出すために「人を中心にした街づくりの考えがある」ということを、わかりやすく訴える、すぐに認識できるようにすることも必要。
- ・ 全体的に「サステナブル」という表現が今回削除されているが、伝わりやすさの面からは重要だと思うので、あってもよいのではないか。
- ・ 【資料4-2】第2章2節の1にて「強くしなやかに」と書かれているが、強靱であることと柔軟であることを合わせて考えてもよいと思う。

- ・ 災害を想定する中で、事前復興、ビルドバックベター（よりよい復興）について、住民の方に伝わりやすいように工夫をした方が良い。
- ・ 四国4県の中核市が位置的に分散しているのは良くも悪くもあり、逆にいえばそれら4都市が強すぎるということもあるので、弱みを強みに活かすという点などから、書き方を検討していければと思う。
- ・ 四国圏の人口が今後20年間で約20%減少すると予測され、暮らしに必要なサービスの維持が困難になると予想される中、地域生活圏の考えが出ており、本省の計画部会の場でも国土計画局長より計画の重要な目玉であるとの話があった。それほど重要な方針であるならば、地域生活圏がこれまでの考え方や制度とどう異なるのか、現状では非常に分かりにくいので、本省にわかりやすい説明を求めてほしい。
- ・ 四国の中枢中核都市(高松、松山、徳島、高知)それぞれの都市機能の維持、4都市の個性を生かしつつ連携を図ることが柱になると考えている。地域生活圏、人口10万人の地域生活圏、人口30万から50万の中枢中核都市との関係整理が必要。
- ・ 四国の実情に合わせて地域での生活を維持するために、どのような地域生活圏としたらよいか検討していただきたい。
- ・ ガバナンスについての問題提起であったと思うが、難しいところもあると思う。
- ・ 四国の地域生活圏と中枢中核都市である県庁所在地が、どのように結びつくか、また四国と域外地域（中国圏、近畿圏、九州圏など）がどのように繋がるのか、そこをどのように捉えるかが重要。
- ・ 【資料4-2】1ページ目の2（1）四国4県の所在、物理的な分散について、ガバナンスの現実性やマネジメント部会の必要性など、4県をどう位置づけるか、実際にそれをどうマネジメントしていくかの検討が重要。
- ・ 次の10年間は、かなり災害リスクが高くなると予想される中で、自然災害だけでなく食糧問題など様々な問題がある。災害時や津波襲来時に広い土地があって、例えばトレーラーハウスがあれば、通常時との使い分けも可能である。今後の具体的な議論を見据えて、骨子の部分で文言の整理等を行っていくべき。
- ・ 田舎においても、DXなど新たな手法を活用でき、物理的だけでなく様々な交流を行うことができるので、このような仕組みをどうやってつくり、輝く四国にしていけるか。そのための骨子であるが、よく整理されていると思う。
- ・ 男木島は、島民の3分の1が移住者で、幼稚園、小・中学校が復活している。
- ・ 四国など地方にいながら東京の会社でフルリモートで働く事例も増えており、働き方

として女性活躍推進の鍵になってくると思われる。その際、デジタルスキルが必要となるので、その底上げも含め、働き方のロールモデルの提案をしたらどうか。デジタルに関する地域の課題については、具体策を講じてコミュニケーションなどで対処できるのではないか。

- ・ 東京大学に設立されたメタバース工学部が女性活躍を推進しており、四国にも支援したいという話がある。地方の産業でも、AI×男女参画、AI×女性活躍推進、AI×働き方改革のようなベンチャーを生み出し先駆者となっていければ良いのではないか。
- ・ アフターコロナで四国に外国人観光客が戻ってきているが、コロナの影響で民宿などが閉業し宿泊の受け入れ体制が整っていない。キャンプ場の増設や野宿に関するルールなどを含めて体制を整えていくべき。
- ・ 四国の魅力を世界に発信するためにも、神社・寺・地域住民・学者などが集まってグローバルコミュニティを作っていけると良い。
- ・ 外国出身の人が、四国の魅力を国内外へ発信する役割を担うと、インパクトが強いので、ぜひ活用してほしい。
- ・ 2022年に四国遍路がロンリープラネットに掲載された裏話として、1人の若者の積極的なプッシュがあった。一方で、遍路道を清掃するボランティアグループは高齢化が顕著であるため、もっと若者にも遍路の素晴らしさを再認識してもらうような活動（遍路道ウォーク、ガイド養成など）がとても重要。
- ・ 【資料4-1】12ページに「暮らしやすい四国」とあるが、誰にとって暮らしやすいのかを明確にすることが必要である。調査対象が「男女10歳以上の通勤通学」となっているので、もっと広い範囲の属性（外国出身の人や、LGBTQの人なども含め）にも調査をしてほしい。
- ・ 「おもてなし遍路道ウォーク」は大学生や子ども連れなどが増えてきており、直島には外国人も戻ってきている。結局は「おもてなし」が大事で、そこから交流が進んでいき、四国の良さを発信できると思う。四国の魅力の発信を各方面でできるようにするのは重要。
- ・ 【資料4-1】15ページについて、ネイチャーポジティブの概念の記載があるが、それぞれのテーマについてすべてを100%実施するのは難しい。費用対効果などを検討しながら、限られた資源の中でどのようなプロジェクトを推進していけば四国にとってプラスになるのか、考えることが必要。
- ・ エビデンスに基づき何をすべきなのかを個々のプロジェクトで考えていく必要があり、例えば、再生可能エネルギー導入の価値が災害時のレジリエンスに直接関係する

とか、地震で物流が途絶えたときに身近なところでの食糧生産が重要であるとか、島しょ部などレジリエンス的に課題となり得るところを中心に対策を行うなど、ポイントを絞った導入の仕方があり得ると考える。

- ・ 【資料1-1】の「シームレスな拠点連結型国土」は災害など緊急時にどう維持するかが最も重要。緊急時を想定したインフラの二重三重化を図っていくことが大事。
- ・ シームレスな拠点連結として、従来のインフラをデジタルなどの新たな仕組みとどう組み合わせるかで、将来の姿を描ける気がする。
- ・ デジタルインフラでも、緊急時を想定し、スターリンク（衛星インターネットサービス）の導入など二重三重化を図る必要があるが、普段使いもすることで災害時に使えるよう、備えをしておくべき。
- ・ 【資料4-1】8ページは、3つの将来像がそれぞれ結びついた図になっているが、【資料4-2】骨子案の3ページの文章では、単に3つの将来像が併記されるにとどまっている。これらが相互に関連し合っていることが分かるよう、全体総括的な一文を加えると良い。
- ・ 私も【資料4-1】8ページは大事と考えており、この将来像を具体的にセットした地域のイメージが何か、というところをつくれれば、概念の具体案になる。
- ・ 学生との意見交換を行った際、四国の一番の強みとして、自然の豊かさと、それが健康的な生活に繋がっているところが挙げられた。自然の環境の保全や利活用で自然と共生する四国について、自然との共生は健康的な生活に結びつく、住めば健康になる、ということも強調して伝えられると良い。
- ・ 四国の将来像は誰のためのものか。「誰もが」という言葉は使われているが、次世代を担う子どもたちへの言及が少ないように思う。四国は教育などの観点から魅力的な場所だと思うため、そういった視点が掘り下げられると、より魅力的で深みがある内容になる。
- ・ 分散している四国4県をどうつなげていくか、具体策や誰がどうマネジメントするかを検討すること重要である。全体目標・目的部分をしっかりとらえた上で、骨子の具体的な内容を検討していくべき。持続可能な次の10年、20年、30年を続けていく上で、次の10年間はどんなステップで何を作り上げていくかを骨子にまとめて、具体的な施策で四国全体のバランスを考えていく。また、集まらなくてもリモートで議論できる環境を作り、具体的な組織を作って実現していくような内容を描いて欲しい。
- ・ 計画を作成して次へ進む中で、各主体の誰がどの段階で、どのような役割を担っていくかを粗く決めておくことも必要であり、柔軟に変更していくことも必要であるた

め、継続して様々な人が話し合いをできる場作りや仕組み作りを、事前にしておく必要がある。

- ・ 計画に関わることが楽しくなるようなイベントを開催するなど、計画に関わる様々な年代の人々が計画に興味を持ち、一緒に街をつくり上げていく事が必要になる。
- ・ 例えば自然の保全は、観光とも密接な関係があるため、四国の魅力のために保全していく、より良くしていくという考えもある。
- ・ コアになるプロジェクトをいくつか作って、その中にすべて良い要素を盛り込むようなプロジェクトケースを試行し実証することも必要。
- ・ 計画自体が大きいので具体的にどう落とし込むかが非常に大事。自治体との連携や具体案の提案、フィードバックなどが必要ではないか。
- ・ 単にハードや建築を刷新するだけではなくて、そこにコミュニティが生まれるきっかけづくりになる取り組みがプラスで考えられると良い。
- ・ BCPの一環でサテライトオフィスを四国に置いている。BCPを立てていても、長期間の疎開先を確保している人や企業は非常に少なく、緊急時に暮らしができ、食料や水が確保できる場所がもっと必要。災害に備えた分散型社会にしていく必要がある。
- ・ 意思決定機関等を四国に置くなどの分散型社会の実現の結果、アーティストやクリエイターが来たりと、文化的観点から高付加価値なコラボレーションに繋がると考えており、面積が小さな四国においては他がやっていないことをやることも大事。
- ・ 地方部において、水と食料の自給率は数字で表れている以上に高いので、四国全体でそれらを確保すると、都市部からの移住者を抱え込むのに十分なキャパシティがある。
- ・ 人の活躍、はたらきをどう見せていくか、あるいはより効果的に発揮してもらうかが重要。これまでのように多額のお金をかけてモノを整備するというよりも人に注目し、個人の興味や特技を発揮できる仕掛けづくりを考えていくことが重要ではないか。
- ・ 交流、コミュニケーション、情報発信など、ソフトのマネジメントの方法論のようなものもセットでつくっていければ良い。
- ・ 四国の夢を掲げることも大事だが、人口減少・流出について、現状の厳しさはデータに基づいて分析・認識しておくべき。コロナ禍で一旦人口流出が大きく減ったものの、2022年から再び人口流出が顕著化しつつある中、四国が持つ価値を発信し、Uターン・Iターン者を呼び込むような戦略を考えるしかない。最も効果が出るように、

対象者を設定し、誰がどうマネジメントしていくかを計画してほしい。

- ・ 広い視点から四国を見ると、地域ごとの特徴を掛け合わせれば、もっとできることがたくさんある。四国の土地や人の特徴、歴史、文化を「見える化」することで、役割分担を産業の中で明確化し、こういった相乗効果が生まれるかなどについて伝わりやすくなると良い。
- ・ 四国圏は、四国遍路の世界遺産登録に向けた活動においても、やっていることが割とバラバラで、4県が同じ方向に向かっていくのか気になる。
- ・ 人口減少や地震、歴史の再認識の話は四国だけでなく日本全体の問題であると思うが、日本の他の地方でもこのような委員会などを行っているか。
→国土形成計画（全国計画）に基づいて、各地域で有識者に意見を聞きながら、広域地方計画の骨子を作っている。
- ・ 人材が必要といわれるが、一つの専門分野に特化した人材ではなく、様々な分野の能力をまとめてマネジメントする能力を持つ人材が必要。世界から全体をマネジメントできる人来てもらい、難しい場合は様々なデジタルの仕組みなどを使いながら交流をしていく。そのようなマネジメントのできる人材が必要。
- ・ 一番重要なのはアルゴリズムで、もう1つがインフラ。資源をいかに配置していくか、四国4県の県庁所在地は物理的に分散しているが、バーチャルで分散しないためにはどのような仕組みをつくればよいか、考えていかなければならない。
- ・ 最近注目されている「リスキリング」は、企業が求めるような生産性の向上に資する能力（プログラミング、会計、英語など）を念頭に置いている。地域を担える人材はそのような人材ではなく、広くコミュニケーションができてリーダーシップをとれる、課題解決のできる人材だが、それがすぐできる効果的な方法があるわけではない。教育現場でそのような人材を育てるのは難しい。
- ・ 異分野交流の仕組みなどを使って、新たな人材を育てる環境が必要。外国の情報に詳しく、日本の事を本当に知っている人でないと、外国に対する情報発信はうまくできないと思う。
- ・ 企業が求めているのは、実はIT人材ではなく、課題解決かあるいは価値創造のできる人材。複眼的にもものを見て分析し、統合することができないとDXはできないし、地域の課題解決もできない。もう少し議論が必要。
- ・ 神戸大学バリュースクール(V.School)は価値創造を行うのに役立つ教育機関となっている。また、視野を広げるにはG1サミット（著名人と一緒に地域の課題をテーマと

して議論するイベント)のような交流機会もある。

- ・ マネジメントをするにあたっては、自分の住む県だけを知っているだけでなく、四国全体の事をよく知っている人を育てていく必要がある。全て詳しくなることは難しいと思うが、遍路や食など、各県を超えた結びつきについて探してみると四国も良いところが見つかると思うので、それらを相互に結びつけていくことが重要。

以上